

編集後記

長引くパンデミックの中、編集委員の伊藤裕子先生、加々美康彦先生、羽後静子先生および事務室担当者のご協力により、『貿易風』第18号を出すことができました。今号の論文は1編だけですが、研究ノートに多くの力作をいただきました。投稿して下さった皆様に感謝いたします。

今号には「オーラルヒストリー」を新しいジャンルとして、岩間優希先生の「冷戦期の外国特派員——元朝日新聞モスクワ支局長・高山智氏に聞く——」を掲載しています。朝日新聞の外国特派員として、冷戦の最前線モスクワに駐在し活躍されていた高山智先生の経験を記録するオーラルヒストリーは、貴重な口述歴史資料です。そのオーラルヒストリーから、当時ソ連の政治や人々の生活など知られざる事柄に触れると共に、日本の先輩新聞記者達が激動の世界で奮闘していた生々しい姿も偲ばれます。語り手と聞き手の共同作業で過去の出来事を記録するオーラルヒストリーには、様々な知的価値があり、また「承前啓後（昔からのものを受け継いで、未来を切り開くこと）」という重要性もあると思います。

『貿易風—中部大学国際関係学部論集—』に掲載される「論文」は「査読付きの論文」です。編集委員会は『貿易風』の「執筆要綱」に従い、投稿論文につき、査読（レフリー）制をとっています。周知のように、論文の査読はピアレビューとも呼ばれ、問題のある論文をチェックし、優れた論文を世に出すことで、学術研究の質を保証し向上させる上で重要な役割を担っています。査読プロセスにおいて、査読の担当者と編集委員会は、その公正性と客観性を堅持する重責を担っています。日本学術会議の「科学研究における健全性の向上について」が指摘したように、科学の発展のためには、ピアレビュー（査読や審査）における公正さを確保することが必要であり、研究者は高い倫理観と見識を持ってピアレビューに当たらなければなりません（2015年）。

近年、「論文査読」の過程における不正行為が相次いで指摘され、社会に大きな衝撃を与えました。去年12月、文部科学省は「国民の科学への信頼を揺るがす」として、適正な査読のあり方について日本学術会議に審議を依頼しました。論文査読上の不正行為の再発防止は、科学者と研究機関、学術誌の重要な責務です。『貿易風』編集委員会は今後に向けて、適正な査読規定を作成しなければならないと思っております。

『貿易風』は「学問の自由」「ピアレビューの公正さ」を守りながら、質を落とすことなく、教育、学術研究の領域に屹立し続けることを祈念しております。

〔編集長 黄 強〕